4/5 Wed.

第627回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 627 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
アントネッロ・マナコルダ *–p.5*
ANTONELLO MANACORDA

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ハイドン
HAYDN

交響曲 第49番 ヘ短調 **〈受難〉**［約24分］ *–p.10*
Symphony No. 49 in F minor, "La passione"
I. Adagio
II. Allegro di molto
III. Menuet
IV. Presto

［休憩］
[Intermission]

マーラー
MAHLER

交響曲 第5番 嬰ハ短調［約68分］ *–p.11*
Symphony No. 5 in C sharp minor
I. Trauermarsch
II. Stürmisch bewegt, mit größter Vehemenz
III. Scherzo
IV. Adagietto – V. Rondo – Finale

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
協力：アフラック生命保険株式会社

4/21 Fri.

第661回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 661 / Suntory Hall 19:00

4/23 Sun.

第125回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 125 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
小林研一郎（特別客演指揮者） *–p.6*
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

ヴァイオリン
Violin
青木尚佳 *–p.8*
NAOKA AOKI

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64［約26分］ *–p.13*
Violin Concerto in E minor, op.64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

［休憩］
[Intermission]

マーラー
MAHLER

交響曲 第1番 ニ長調 **〈巨人〉**［約53分］ *–p.14*
Symphony No. 1 in D major "Titan"
I. Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich
II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
IV. Stürmisch bewegt

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
協力：横浜みなとみらいホール（4/23）

4/29 Sat. holiday

第256回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 256 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

4/30 Sun.

第256回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 256 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Honorary Guest Conductor
尾高忠明（名誉客演指揮者）–p.7
TADAAKI OTAKA

ハープ
Harp
グザヴィエ・ドゥ・メストレ –p.8
XAVIER DE MAISTRE

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

グリエール
GLIÈRE
ハープ協奏曲 変ホ長調 作品74［約27分］–p.17
Harp Concerto in E flat major, op. 74
I. Allegro moderato
II. Tema con variazioni
III. Allegro giocoso

［休憩］
[Intermission]

ラフマニノフ
RACHMANINOFF
《生誕150年記念》
交響曲 第2番 ホ短調 作品27［約60分］–p.18
Symphony No. 2 in E minor, op. 27
I. Largo – Allegro moderato
II. Allegro molto
III. Adagio
IV. Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団　東京芸術劇場

指揮
アントネッロ・マナコルダ
ANTONELLO MANACORDA, Conductor

©Nikolaj Lund

欧米で注目を浴びる鬼才が読響デビュー

欧米でうなぎ登りの評価を得ている、時代の先端を走るアーティスト。

イタリア・トリノでフランス・イタリア系の家庭に生まれ、アムステルダムで教育を受けた。アバドが設立したマーラー室内管の創設メンバーの一人として、長年コンサートマスターを務め後に、ヨルマ・パヌラのもとで指揮を学ぶ。2010年からカンマーアカデミー・ポツダムの芸術監督を務め、ソニー・クラシカルからリリースしたメンデルスゾーンとシューベルトの交響曲全集は高い評価を得て、数々の賞を受賞。21年からベートーヴェンの交響曲の全曲録音に取り組んでいる。

これまでにドレスデン国立歌劇場管、ミュンヘン・フィル、ベルリン放送響、バンベルク響、ロイヤル・ストックホルム・フィルなど欧米各地の楽団に招かれたほか、21年夏にはザルツブルク音楽祭にザルツブルク・モーツァルテウム管を指揮してデビュー。22年5月にはベルリン・フィルにデビューし、バリトンのクリスティアン・ゲルハーヘルとのマーラー〈リュッケルト歌曲集〉などを振り、絶賛された。

オペラでは、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、パリ・オペラ座、バイエルン国立歌劇場、フランクフルト歌劇場などに登場し、〈フィガロの結婚〉、〈魔弾の射手〉、〈椿姫〉、〈イェヌーファ〉を指揮し、好評を博した。

今後は、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、バイエルン放送響、ウィーン響などへ客演する。

4/21 名曲

4/23 横浜マチネー

Maestro

指揮

小林研一郎
（特別客演指揮者）

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

マーラー〈巨人〉で 渾身のタクト！

©山本倫子

熱い音楽作りで絶大な人気を誇る“炎のマエストロ”。83歳を迎え円熟を深める名匠がマーラーの〈巨人〉を振り、会場を熱狂へと誘う。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々の楽団のポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれスメタナ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号を、20年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を授与された。国内では11年に文化庁長官表彰受賞、13年に旭日中綬章を受章、21年に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル、名古屋フィルおよび群馬響の桂冠指揮者、九州響名誉客演指揮者、名古屋フィル桂冠指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授などを務めている。オクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリースしている。

昨年10月には、読響創立60周年記念の東北3公演（岩手県盛岡市、宮城県石巻市、福島県いわき市）を成功に導いた。

指揮

尾高忠明
（名誉客演指揮者）

TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

名匠が響かせる ラフマニノフの ロマンティックな旋律

©読響

4/29 土曜マチネー

4/30 日曜マチネー

Maestro

国内外の名だたるオーケストラと共演を重ねる日本を代表する名匠。数々の名演を生んだ熟達のタクトで、ラフマニノフの名曲などを指揮し、読響から華麗なサウンドを引き出す。

1947年生まれ。桐朋学園大学、ウィーン国立アカデミーで学んだ後、東京フィル常任指揮者（74〜91年／現・桂冠指揮者）に就任。BBCウェールズ響首席指揮者（87〜95年／現・桂冠指揮者）を務め、イギリス音楽を手がけた。

読響では92〜98年に第6代常任指揮者を務め、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督（2004〜15年／現・名誉音楽監督）、メルボルン響首席客演指揮者（10〜12年）、新国立劇場オペラ芸術監督（10〜14年）を歴任。現在は大阪フィル音楽監督、N響正指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者。21年から「東京国際音楽コンクール〈指揮〉」審査委員長などを務めている。国内の主要楽団のほか、世界各地の楽団に客演。大英勲章CBE、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを授与される。サントリー音楽賞、有馬賞（N響）、北海道文化賞、関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、JXTG音楽賞洋楽部門本賞など受賞多数。21年秋には、旭日小綬章を受章。後進の指導にも力を入れ、東京芸術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授、桐朋学園大学特命教授を務めている。

4/21
名曲

4/23
横浜マチネー

Artist

©井村重人

ヴァイオリン

青木尚佳

NAOKA AOKI, Violin

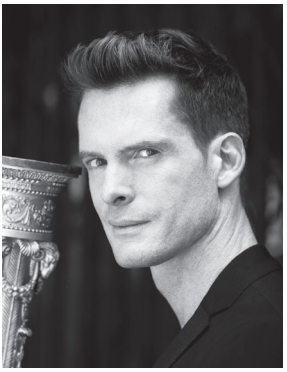
ドイツの名門ミュンヘン・フィルのコンサートマスターを務める実力派。1992年東京生まれ。桐朋学園大学、英国王立音楽大学、ミュンヘン音楽大学などで研鑽（けんさん）を積み、2014年6月にはスイス国際音楽アカデミーで小澤征爾の薫陶（くんとう）を受けた。同年パリで行われたロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクールで第2位、併せてコンチェルトの最良の解釈に贈られるモナコ公アルベール2世賞を受賞する。同コンクール入賞後、本格的な演奏活動を開始。東京・春・音楽祭など各地で精力的にリサイタル活動を続けるほか、海外での活動の場を広げるとともに日本国内においてもN響、東京響など数多くのオーケストラと共演し、高い評価を得る。使用楽器はアントニオ・ストラディヴァリ 1713年製作「ロードヴァルド」。

4/29
土曜マチネー

4/30
日曜マチネー

Artist

“世界最高峰のヴィルトゥオーゾ”と評されるハープ界の貴公子。9歳からハープを学び、1996年にバイエルン放送響に入団。98年USA国際コンクールで優勝。99年から2010年までウィーン・フィルのソロ・ハープ奏者を務め、数々の巨匠と名演を残す。ソリストとして、プレヴィン、ラトル、ガッティらの指揮でウィーン・フィル、バイエルン放送響、パリ管、モーツァルテウム管、イスラエル・フィルなどと共演。ザルツブルク音楽祭やウィーン芸術週間など主要な音楽祭に招かれ、輝かしい音色と超絶テクニックで世界各地の聴衆を魅了している。22年にシュトゥッツマン指揮ケルンWDR響とのハープ協奏曲集のアルバムをリリースし、話題を呼んだ。読響とは16年と17年に共演して好評を博した。



©Jean-Baptiste Millot

ハープ

グザヴィエ・ドゥ・メストレ

XAVIER DE MAISTRE, Harp

ハイドン
交響曲 第49番 ヘ短調〈受難〉

1766年、ヨーゼフ・ハイドン（1732〜1809）はエステルハージ家の副楽長から楽長へと昇格する。この頃からハイドンの交響曲に短調の作品が目立つようになる。ハイドンが残した第1番から第104番までの交響曲中、短調作品は11曲しかないが、その内の5曲が1766年から72年までの6年間に集中的に書かれているのだ。そして、これら劇的で緊迫感あふれる作品群を生み出した時期は、しばしば「疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドラング）期」と呼ばれる。本来「疾風怒濤」はドイツの文学運動を指す用語で、音楽と直接的な結びつきのあるものではないが、その語感のインパクトもあって、強い感情表現を伴う楽曲の性格をよく伝えている。

これらの短調作品のひとつ、交響曲第49番ヘ短調〈受難〉は、楽章構成の点でも特徴的だ。4楽章構成ながら「緩―急―緩―急」という教会ソナタのスタイルがとられ、すべての楽章が当時の交響曲としては珍しいヘ短調で書かれている。そしてニックネームが「受難」。教会や宗教的儀式に関連した作品だと考えるのが自然だろう。しかし近年の研究によれば、「受難」の愛称は事後的に付けられたものにすぎず、また「陽気なクエーカー教徒」なる別の愛称でも呼ばれていたという。「受難」と「陽気なクエーカー教徒」ではずいぶんイメージが違うが、後者は喜劇の題名に由来し、曲が劇音楽として用いられた可能性を示唆する。

第1楽章　アダージョ　悲嘆に暮れるような重い足どりが続く。

第2楽章　アレグロ・ディ・モルト　切迫感のあるドラマティックな急速楽章。

第3楽章　メヌエット　寂しげなメヌエットとひなびたトリオがコントラストを描く。

第4楽章　プレスト　反復的な動機が緊張感を高める。情熱的なフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1768年／初演：不明／演奏時間：約24分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

マーラー
交響曲 第5番 嬰ハ短調

「交響曲は世界のようでなくてはならない。すべてを包み込まなくてはならないのだ」。グスタフ・マーラー（1860〜1911）はシベリウスと会った際にこのように語った。音楽で森羅万象を表現するという大胆な思考法に、シベリウスはさぞ戸惑ったことだろう。

世界を表現するとなれば、なんらかの標題性が必要になってくる。交響曲第1番はジャン・パウルの大長編小説にちなんで〈巨人〉と呼ばれた。交響曲第2番〈復活〉、第3番、第4番では声楽が入り、テクストが作品の方向性を定めてきた。しかし、交響曲第5番は純粋に器楽のみによる交響曲であり、明示的な標題も持っていない。しかも、当初は伝統的な4楽章制の交響曲として構想されていたという。マーラーは標題のない純器楽作品としての交響曲についに取り組んだことになる。

そして、言葉の助けを借りない交響曲であるがゆえに、相対的に目をひくのが「第5番」という数字。交響曲に付与される番号は、単に作曲した順番を示すにすぎないはずだが、「第5」や「第9」といった数字はベートーヴェンのあまりに偉大な傑作によって、しばしば特別な意味付けがされてしまう。「第5」であれば、「苦悩から歓喜へ」「暗から明へ」といった直線的なドラマを連想せずにはいられない。では、マーラーの交響曲第5番もやはりそのような図式に沿っているかと問われると、答えはイエスともノーともいえる。葬送行進曲で始まり、最後は喜びにあふれた音楽で終わると思えば、これはまさしく「苦悩から歓喜へ」。しかし、終楽章の絢爛（けんらん）たる響きの奔流（ほんりゅう）のなかには、どこか歪（ゆが）んだ笑いが潜んでいるようにも感じられる。

第1楽章　葬送行進曲、一定の歩みで厳格に、葬列のように。トランペットのソロで荘重に開始される。葬送行進曲ではあるが、ベートーヴェンの交響曲第5番冒頭の「運命の動機」や、メンデルスゾーンの“結婚行進曲”も連想させる。重苦しい葬送行進曲の間に、激情がほとばしるトリオ（中間部）が二度、さしはさまれる。暗示的な弦のピッツィカートで楽章を閉じる。

第2楽章　嵐のように荒々しい動きで、きわめて激烈に。前楽章のムードを受け継いで、闘争的な楽想がくりひろげられる。後半で突然、金管楽器の輝かしいコラールが出現するが、この勝利は一時の幻。おしまいは虚空に消えるかのよう。

第3楽章　スケルツォ、力強く、速すぎずに。大規模なスケルツォ楽章で、スケルツォらしい諧謔味のみならず、舞曲的な性格をあわせもつ。また、随所でホルンがソロ楽器風に扱われ、ホルン協奏曲的な側面も見せる。優雅で陶酔的な瞬間も訪れるが、やがてホルツクラッパーがリズミカルに打ち鳴らされ、骨がカタカタと鳴る死の舞踏を暗示する。外見上の陽気さ、優美さは見せかけだけのものなのだろうか。結尾は華やかだが、やや唐突で強いられた喜びのようにも感じられる。

第4楽章　アダージエット、とてもゆっくりと。弦楽器とハープのみで演奏される愛の音楽。マーラーと親交のあった大指揮者ヴィレム・メンゲルベルクによれば、作曲中に結婚した「アルマに対するマーラーの愛の宣言」。ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画『ヴェニスに死す』で効果的に用いられ、広く知られるようになった。切れ目なく第5楽章へ続く。

第5楽章　ロンド・フィナーレ。ホルンの呼びかけに、牧歌的な楽想が続く。軽やかで快活なロンドが始まるかと思いきや、フーガの手法が駆使されて、目まぐるしく変化に富んだ楽想が続く。楽天的な雰囲気を基調としながら、曲はなんども高潮し、やがて第2楽章で姿を見せたコラールが朗々と奏でられ、壮麗なクライマックスが築かれる。ついに歓喜の瞬間が訪れたのか。だが、終結部の狂騒的な喜びはこれ見よがしで、どこかコミカルだ。ここにアイロニーを読みとるべきなのか?

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1901～02年／初演：1904年10月18日、ケルン／演奏時間：約68分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ムチ、銅鑼）、ハープ、弦五部

メンデルスゾーン
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

古典派寄りの初期ロマン派、フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ（1809～47）は、短命ながら、さまざまなジャンル（オペラを除く）に多くの作品を残している。なかでも協奏曲は多彩で、1台ピアノのための協奏曲が習作を入れて3曲、2台ピアノのためのものが2曲。ヴァイオリン協奏曲は2つあり、まず弦楽合奏とのニ短調の曲が書かれたが、これから聴く管弦楽とのホ短調の曲がなんといっても有名だ。

「19世紀のモーツァルト」というイメージと、天衣無縫の楽想とが相まって、名曲を軽々と量産したかのように思われがちである。しかし実際のメンデルスゾーンは、慎重派も慎重派で、「改訂魔」と呼んでもよいくらい。本作の構想がめばえたのは1838年。作品があらかたでき、初演ヴァイオリニストのフェルディナント・ダーヴィットと意見交換を始めたのが44年の秋。同年12月には徹底的な改訂がなされ、さらに翌45年のはじめにダーヴィットが独奏パートを彫琢、ようやく初稿が成ったのだった。同年の初演を経て、さらに手直しが入り、今日聴く姿になった。

第1楽章は協奏曲の定石に反して、開始後すぐに独奏ヴァイオリンが登場する。またその旋律の、甘くやるせないこと。楽章最後のぐいぐいと速まるテンポも思い合わせると、ユダヤの音楽「クレズマー」からの影響をみてよいかもしれない。北ドイツの名門、メンデルスゾーン家は、ユダヤ人の家系であった。

第2楽章は、第1楽章からファゴットのソロで結ばれ切れ目なく始まる。独奏ヴァイオリンが歌う旋律はオペラ・アリア風。中間部は短調に傾いて、どこか物狂おしい。

第3楽章も前楽章から間髪入れずに始まるが、最初は独奏ヴァイオリンが口ずさむ「序奏」のように聞こえるだろう。これがすうっと明るみ、ファンファーレがあり、主部が始まる。飛び跳ねる主題、マーチ風の主題、たっぷりと歌う主題。それらが絡み合う。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

マーラー
交響曲 第1番 ニ長調〈巨人〉

グスタフ・マーラー（1860〜1911）は、ボヘミアの小村に生まれ、ウィーンで学んだ、19世紀と20世紀にまたがる作曲家・指揮者。世代的にみると、ワーグナーの遅く生まれた息子、もしくはシェーンベルクの歳の離れた兄、といったところか。

マーラー28歳の年、1888年に書かれたこの記念すべき最初の交響曲は、当初5楽章から成っていた。その後、93年にハンブルクで、94年にワイマールで演奏するにあたり、マーラーは全体を前半3楽章・後半2楽章の2部に分け、これを交響曲ではなく「交響詩」と名付けた。ハンブルクでの演奏に際してはさらに、彼が愛読した小説家、ジャン・パウルの著作名から採った〈巨人〉をタイトルとし、各楽章にもジャン・パウル風の標題をつけた。

ところが4度目の演奏（96年ベルリン）以降、マーラーは標題のたぐいを、〈巨人〉という総タイトルを含め全部はずしてしまう。当初二つ目の楽章に置かれていた〈花の章〉にいたっては、楽章そのものが削除され、作品はふたたび「交響曲」と銘打たれることに。交響曲は、古典派のハイドン、ベートーヴェン以降、4楽章制をとるのが基本だ。つまり、見た目にもそれと分かる形へと模様替えが行われたのである。99年の初出版にあたっては、それこそ古典派の交響曲よろしく、第1楽章と第2楽章にリピート記号を追加。もちろん、細部の書き換えも、この間、数多くなされている。

以上、こまごまと成立経緯を示したのは、マーラーがいかに「交響曲」という伝統形式を意識しながら、同時にそれを拡張しようとしたか、その苦闘の跡を示すためである。拡張は「文学化」と言い換えることもできるだろう。小説の作品名にあやかるといった点に留まらない。音楽そのものを文学化したのである。

具体例として第3楽章を挙げよう。冒頭のコントラバスが弾く葬送行進曲のようなメロディ。これは日本でも「しずかな鐘の音」といった歌詞で知られる、あの有名な旋律（元はヨーロッパに古くから伝わる戯（ざ）れ歌）のパロディではないか？　長調であるはずのものが、陰うつな短調に変えられている。マーラーはふざけているのだろうか。

答えはこの少し先にある。ズンチャ・ズンチャといったリズムに乗って、クラリネットとファゴットが素っとんきょうなメロディを吹くシーン。なにか村祭りにでも出くわしたような気分になるが、マーラーはここに、なんと「パロディで」演奏せよと指示を書きつけているのだ。そう、パロディ「のように」聞こえたものは、実際、パロディ「として」演出されたものだった！　言ってみれば、浮世を描こうとするのではなく、浮世から「一歩引いた」態度をとる。するとどうだろう。生と死が背中合わせに見えてこないだろうか？　冒頭のおごそかな葬送が、元は世俗の戯れ歌ということになれば、これは背中合わせの生と死。そしてその葬列の前を、村祭りの一団が愉快に過ぎてゆけば、これもまた背中合わせの生と死だ。ふざけているのではない。きわめて文学的なまなざしが、ここにはあるのだ。

第1楽章は、ごく微かなラの音が、弦楽器によって7オクターヴにもわたって重ねられ開始する。それがひたすら長く引き伸ばされ、最初は何拍子なのかもわからない。そんな「大気」の中から、やがてカッコウの声が聞こえ、春が萌えいずる。

第2楽章は元気いっぱいのワルツ（のパロディ）。中間部も、やはり踊りのリズムに支配されるが、こちらはずっと穏やかで気だるい感じ。その後、ワルツの部が短く再現される。

第3楽章は、上述の葬送を両端に配し、中間に弱音器つきの弦が歌う夢幻的なシーンを置く。自作の歌曲集〈さすらう若人の歌〉第4曲からの引用である。その歌詞は「菩提樹のもとで……ぼくは忘れた、生きることの苦しみを」というもの。

第4楽章は、第3楽章の葬送を断ち切るようにして、突如、爆発的に開始する。悲しみと喜び。平安と闘争。第1楽章冒頭の回想。さまざまな感情、さまざまな情景が交錯し、最後に到達するのは、ファンファーレ（ホルン奏者が起立して鳴らす）も輝かしい圧倒的凱歌だ。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲：1884、88年／初演：1889年11月20日、ブダペスト（初稿による）／演奏時間：約53分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部

グリエール
ハープ協奏曲 変ホ長調 作品74

レインゴリト・グリエール（1875〜1956）は、ラフマニノフやスクリャービンと同世代にあたるロシアの作曲家。現在のウクライナに生まれた彼は、モスクワ音楽院を卒業後、教師、指揮者としても活躍し、旧ソヴィエト連邦初期の音楽界で指導者的な存在となった。近現代にあってロマン主義的・民族主義的な作風を旨とし、中央アジアの伝承音楽の研究でも実績をあげている。代表作には、交響曲第3番〈イリヤ・ムーロメッツ〉、ロシア革命後のバレエの方向性を確立したとされる〈赤いけしの花〉、日本では吹奏楽で人気のバレエ音楽〈青銅の騎士〉などがあり、本作のほか、珍しいコロラトゥーラ・ソプラノやホルンのための協奏曲でも知られている。

この曲は第2次世界大戦直前の1938年に書かれた作品。同年11月モスクワ音楽院にて、クセニア・エルデリー（1878〜1971）の独奏により初演され、やがてハープの重要レパートリーとなった。なおグリエールは、エルデリーのアドバイスを得ながら完成したため、彼女を共同作曲者としてクレジットしようとしたが、エルデリーはその申し出を断ったという。ただし1940年出版の楽譜には編集者として名を連ねている。曲自体は19世紀ロマン派風の書法による明快な作品。全体に明るく伸びやかな曲調を持った、艶やかで陶酔的なまでに美しい音楽だ。

第1楽章　アレグロ・モデラート　優雅だが力強い第1主題と優美でゆったりした第2主題を軸に進行。ラフマニノフを彷彿（ほうふつ）させる濃厚なロマンの世界が展開される。

第2楽章　主題と変奏　低音弦楽器の導入に続いて、ハープがロマンティックな主題を提示し、6つの変奏が続く。色彩的な変化を加えながらメランコリックな音楽が展開され、アルペッジョをはじめとするハープならではの美感が存分に発揮される。

第3楽章　アレグロ・ジョコーソ　民謡風の軽快な主題を中心に運ばれる、活発なフィナーレ。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1938年／初演：1938年11月23日、モスクワ／演奏時間：約27分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏ハープ

ラフマニノフ
交響曲 第２番 ホ短調 作品27

近代ロシアの作曲家で大ピアニストでもあったセルゲイ・ラフマニノフ（1873〜1943）は、看板ともいえるピアノ絡みの作品のみならず、3曲の交響曲をはじめ他のジャンルにも少なからぬ作品を残している。本作はその中でも名品の誉(ほま)れ高い一曲。生誕150年の今年は特に演奏機会が多い。

19世紀終盤は創作面でスランプに陥っていたラフマニノフだが、やがて回復し、1901年のピアノ協奏曲第２番を皮切りに、約15年にわたって次々と名作を生み出した。この曲は、そうした充実期の1906〜07年、不穏な国内を離れて住んでいたドレスデンで作曲され、08年2月ペテルブルグのマリインスキー劇場で初演された。以後各地で好評を博したが、一部カットされての演奏が慣例ともなった。しかし70年代前半にアンドレ・プレヴィンが完全全曲版を録音して以来、曲自体が見直され、人気もグングンと上昇。現在では通常、完全版で演奏される。

本作の最大の特徴は「果てしないロマンの流れ」にある。甘美で息の長いメロディ、ノスタルジーとメランコリーを湛えた曲想、分厚く豊麗な響きといった要素が全編に横溢(おういつ)している。ただし古典的な4楽章構成がとられており、その形式の中で独自の大交響曲を成立させた点にラフマニノフの手腕が示されてもいる。

第1楽章　ラルゴ―アレグロ・モデラート　全曲で重要な役割を果たす諸動機が現れる暗く長い序奏の後、情感豊かな第1主題と抒情的な第２主題を中心に、劇的な音楽が展開される。

第２楽章　アレグロ・モルト　スケルツォ風の楽章。溌剌とした主部に、細かな動きの中間部が挟まれる。

第３楽章　アダージョ　憧憬に充ちたメロディが流れゆく陶酔的な緩徐(かんじょ)楽章。メイン主題はポピュラー音楽としても有名になった。

第４楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな主題に流麗な主題が加わり、躍動的に進行。華やかに結ばれる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1906〜07年／初演：1908年2月8日、ペテルブルグ／演奏時間：約60分
楽器編成／フルート３（ピッコロ持替）、オーボエ３（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット２、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール）、弦五部